

石原 俊『硫黄島—国策に翻弄された130年』

(2019 中央公論新社)

清 水 美 里

(PRIME 研究員)

I

虐げられた者は無垢でなければならないかのような圧力が働くことがある。しかし、虐げられた者は必ずしも弱者ではないし、暴力と無縁の聖者でもない。にもかかわらず、虐げられた者は些細なことから訴えることを咎められ、ひいては虐げられた者たちよりも罵詈雑言を浴びせられることがある。そういった風潮がある中で、本書からは虐げられた側の人びとの歴史の尊厳とその叙述のあり方を示してもらった。

本書の帯には「硫黄島の星条旗」と題するジョー・ローゼンタールが撮影したあの有名な写真が印刷され、「帝国・戦争・冷戦」という字が躍っている。本書の本文では写真「硫黄島の星条旗」は95頁にある。評者は本書を手にとった時点と、読み終えた時点でこの写真の見方が変わった。はたらく星条旗の下、写真では三角形のぼやけた平地、「ここに社会があった」と本書は訴える。そしてかつてそこに住んでいた人びとはいま各地に離散した。しかし、離散してもなお墓参などを通じて社会（community）を維持していることを本書は伝える。

II

本書の目的は2つある。一つは硫黄島の「地上戦」イメージからの解放である。もう一つは硫黄

島の社会史をアジア太平洋の近現代史に位置づけることである。この2点の作業によって、おなじみの冷戦下で造られた平地的な「戦後イメージ」を壊し、新たな20世紀像を構築するのが本書の試みである。目次は以下の通りである。

はじめに—そこに社会があった

第1章 発見・領有・入植——一六世紀～一九三〇年頃

第2章 プランテーション社会の諸相——一九三〇年頃～四四年

第3章 強制疎開と軍務動員——一九四四年

第4章 地上戦と島民たち——一九四五年

第5章 米軍占領と故郷喪失——一九四五～六八年

第6章 施政権返還と自衛隊基地化——一九六八年～現在

終章 硫黄島、戦後零年

基本的には時系列で記述されているが、各章の中に入っていくと年代あるいは空間が行きつ戻りつする。以下、本書の内容を章ごとに紹介する。

第1章はクック艦隊が硫黄の香りのする島を「発見」してから20世紀初頭までの人間と硫黄列島（硫黄島、北硫黄島、南硫黄島）の関わりと硫黄列島に定住社会が形成される過程が描かれてい

る。ここで興味深いのは野心家たちが小笠原や硫黄島の「開発」の先鞭をつけていたことである。自らを小笠原発見者の子孫と偽証した「小笠原貞任」、19世紀に移住した「帰化人」、ジョン万次郎、榎本武揚、田口卯吉、玉置半右衛門、水谷新六などである。硫黄採掘による一攫千金を狙い、硫黄島の「拝借願」を提出した依岡省三と田中栄二郎は彼らの後続についた野心家であった。第3節では硫黄島の産業が硫黄採掘から糖業、糖業からココア、レモングラス、デリスなどの栽培へと産業が転換していくプロセスが描かれる。第4節では集落の様子が地理学者の記録などから再現される。硫黄島に社会があったことを実感させられると同時に、「拓殖会社」の支配が強いために「島民の政治的自治機能は非常に脆弱であった」ことが分かる。

第2章では、硫黄島の「拓殖会社」によるプランテーションシステムと小作人の抵抗が論じられる。「拓殖会社」は久保田拓殖合資会社(1913年～)、硫黄島拓殖製糖会社(1920年～)、硫黄島産業株式会社(1936年～)と改組している。第1章の末尾にすでに「拓殖会社」が支配者として君臨していた事実に触れられるが、第2章ではその日常の権力の異常性がしたためられている。さらに、硫黄列島と大東島のプランテーションの連続性が指摘され、北西太平洋の歴史性からの位置づけがなされる。続いて、硫黄島と北硫黄島の「生活」が再現される。2つの島の生活にはそれぞれの特色があるものの、基本的に搾取をくり抜けながらも自律したエコノミーが存在し、各世帯、複数世帯での共同体を形成することで硫黄列島式の「幸福」を享受していたことが分かる。

第3章では北西太平洋のパワーバランスの中で翻弄される硫黄島民の戦争体験が確認される。20世紀前半、日米によって北西太平洋の島々が分割され、日本は硫黄島を要塞化していった。第2節以降では硫黄島民と北硫黄島の強制疎開や徴用の

実態が明らかにされる。ここで強制疎開の基準をどこに置くかが問題となるが、著者は「強いられた」という感覚によりそう。「着の身着のまま」の強制疎開後、彼らは難民化した。北硫黄島の強制疎開は逃避行というに等しいものであった。第3節では硫黄島史上最大の「闇」である偽徴用問題が詳述された。本章では硫黄列島と島民は「疎開による故郷追放か、軍務への動員か、地上戦の道連れか、いずれかの途」(92頁)を強いられていったことが縷々述べられた。

第4章は「地上戦」をめぐる記憶の問題が射程となる。第1節では先に映像作品の「地上戦」を論じ、その上で島民の語りのなかの「地上戦」を再構成している。著名なクリント・イーストウッド監督の硫黄島2部作への論証がなされた他、著者が高く評価する作品はNHKドキュメンタリー『硫黄島玉砕戦一生還者たちが語る真実』である。これは「虫の眼」からみた硫黄島の戦いを明らかにしたものであったという。壕内の状況というのは「人間の耐久試験」であったという秋草鶴次の生存者の語りが印象的である。第2節は、偽徴用で置き去りにされた須藤章氏と原光一氏の語りで構成されている。彼らの親類の死や自らの負傷は無謀で理不尽な命令の結果によるものであった。そして、アメリカに投降後、駐留する米軍が水力発電機を使い海水を水に変えその水でシャワーを浴びた語りから、アメリカへの称賛がはじまる。第3節では北西太平洋のなかで「地上戦」が位置づけられる。これは日本帝国崩壊のなかの硫黄島の位置づけでもある。筆者は、沖縄戦が唯一の地上戦ということは間違いであるが、硫黄島がもう一つあるという言説はさらに危険であって、マニラ、グアム、中国、東南アジア、南洋群島等々に、日本帝国が遂行した地上戦があるのだと主張する。

第5章からは冷戦の章である。以降、小笠原諸島と硫黄列島は「南方諸島」と呼ばれる。ここでは「南方諸島」が米軍占領下におかれ核ネットワー

クの戦略拠点の一つになっていく過程が叙述される。そして、硫黄列島の住民たちは故郷喪失者（ディアスポラ）となった。第2節では1940年代の帰島運動の実態が明らかにされた。1947年7月に開催された「小笠原島硫黄島島民帰郷請願大会」が大きな役割を果たしたという。第3節では帰島から当面の金銭補償へ運動が切り替わっていったことが述べられた。島民は日本政府からの「見舞金」と、アメリカからの補償金600万ドルを受け取った。しかし、補償金の配分をめぐる地主と小作の対立が鮮明化し、600万ドルが島民の団結を割く結果となった。第4節では戦後の生活の記録が綴られた。筆者は、多くの日本国民（本土住民）にとって「戦前」より「戦後」が相対的に「豊かな」生活だったという自意識があるが、硫黄列島民の自己認識においては「戦前」より「戦後」が苦難の経験として回想されると述べる。

第6章第1節では、小笠原「返還」から硫黄列島が排除されていったことが確認され、島民が1969年硫黄島帰島促進協議会、71年全国硫黄島島民の会を結成、76年には国・都に損害補償要求をしていったことが述べられる。本節では硫黄島における「地上戦」の遺骨収集についても述べているが、2018年なおも約8千から9千柱が未収容という。第2節では硫黄島の軍事利用と島民の故郷喪失状況の永続化が論じられる。1980年代硫黄島はシーレーン防衛構想のもと日米の軍事利用が活発化する。ソ連が崩壊し、1993年には米沿岸警備隊が撤退するが、硫黄島には未だ帰れないのである。第3節では硫黄島の墓参の様子が描かれる。筆者は2015年に小笠原村の訪島事業に研究者として参加申請を認められている。そして、山崎氏と出会い北硫黄島のことを知った。山崎氏は、第2章から北硫黄島について雄弁に語ってきた人物である。我々はここで、軍令で強制疎開させられた北硫黄島のことを「ほとんど知らなかった」事実を共有する。

終章では硫黄島が「帝国」「戦争」「冷戦」の最前線であり、いまだに戦後を迎えていないことが強調されている。戦前の硫黄島は糖業プランテーションとココア闇市場の複合的な植民地開発のモデルであった。戦後の硫黄島は秘密基地化し、島民は冷戦が生んだディアスポラになっていく。本書はかつて硫黄島に1000名を超える島民がおり、彼らの社会が存在していたこと、103名の島民が地上戦に動員され、93名が亡くなったことを伝える。さらに硫黄島は終わらない冷戦の過酷な現場であり、帰島を拒む現状は「不作為の作為」であると批判する。筆者はせめて硫黄島での平和祈念会館の宿泊を1泊ではなく数週間にすべきであり、政府は責任をもって防衛省、自衛隊を説得すべきであると主張する。

Ⅲ

本書からは大きな啓発を受けた。とくに、硫黄列島民の戦災を可視化するいくつかの試みと、硫黄島の社会インフラに関する記述を興味深く読んだ。

まず島民の戦災について述べる。硫黄列島の社会は「帝国」「戦争」「冷戦」の「国策に翻弄された」ものであった。ただし、硫黄島で起きている不条理を訴えるためにはまず「そこに社会があった」ことを訴えねばならない。その上でようやく、「冷戦」構造のなかで不可視化された「戦争」被害と旧「帝国」の責任を追及して行くことができる。

北硫黄島の強制疎開とその公的扶助からの排除と硫黄島で起きた偽徴用は、どちらも戦争というどさくさまぎれに、一部の身勝手な人たちによって行われた腹立たしい話であった。しかし、この2件が世に明るみになり補償という話になるまでには長い年月を必要とする。1954年2月衆議院外務委員に参考人招致された藤田鳳全（小笠原島硫黄島帰郷促進連盟常任委員）は「強制疎開時に東京都小笠原支庁長であったNが、都からの公的扶

助を『島民を押さえつけて』独断で断り、島民が『泣寝入りになってしまった』(142頁)と証言した。

「偽徴用」の問題が被害者によって公表されたのは1960年代である。1944年、徴用の対象から外れるはずの22名が島に残留させられ、ココアの採集を手伝うようになる。しかし、これは実は正規の徴用に基づく業務ではなかった。責任者であった拓殖会社常務Sは自分だけ逃げ、「偽徴用」した16名を置き去りにする。同年9月27日陸軍司令部は「島民が勝手に徘徊されては軍規上困る」ということで彼らを正式徴用した。硫黄島産業株式会社被害者擁護連盟は「会社は軍需工場に指定されていなかったにもかかわらず、軍の医療用に供出するコカインの製造だと駐留軍に申告し、硫黄島村長にも協力を依頼して『偽徴用』におよんだことは明らかだとして、関係者に謝罪・補償をおこなうよう要求」(86頁)し、連盟代表の瀧澤秀吉氏は1994年に亡くなるまでこの「偽徴用」問題の追及を続けていたという。

この2つの問題は1944年から10年経った1950年代の日本政府からの「見舞金」と20年近く経った1960年代のアメリカ政府からの「補償金」受給を契機によりやく明らなみになった。しかし、この2つの事件にたいする謝罪はあったのであろうか。そもそも硫黄列島に1254人(1944年)もの人が住んでいた。硫黄列島には彼らの社会があったのであり、かつ未だに奪われたままなのである。

本書がすぐれている点は、単にこれら「不正義」の告発するのではなく、なぜこれらの問題が放置され世に知られていないのかという問いをかけたことにある。本書の目的の1つは「地上戦」イメージから硫黄島を解放することであった。もっと言えば、有名なジョー・ローゼンタール撮影「硫黄島の星条旗」やクリント・イーストウッド監督の硫黄島2部作などのビジュアルとの想像力の戦い、あるいは『硫黄島からの手紙』の原作『「玉

砕総指揮官」の絵手紙』に代表される「栗林英雄史観」を支える言説との想像力の戦いである。

硫黄島の摺鉢山に星条旗を掲げる六人の海兵隊員を被写体とする、ジョー・ローゼンタールのあの有名な写真と相まって。いずれにせよ、「イオウトウ」または“Two-jima”にかかわる歴史意識は、日米双方とも「地上戦」イメージにすっかり覆いつくされている。(iii頁)

本書には2つの地図が載せてある。東は台湾から西はハワイまで、南はニューギニアから北は千島列島までという「北西太平洋地図」と、硫黄列島を南端にはせず、マリアナ諸島までを含んだ「日本列島および硫黄島地図」である。おなじみの小笠原諸島を枠で囲った日本地図から大胆に視点をずらした2枚の地図からは、本書は島という点の歴史ではなく、海洋という面の歴史を描いているという意識が感じられる。本書の表紙にわざわざ硫黄島のルビを「いおうとう」としている点も、「いおうじま」ではないのかと感じる読者にとっては些細ながら既成概念を揺るがされ、やがて「いおうじま」は英語だったのかと知ることになる。

硫黄島は日本のみならずアメリカも「苦戦」を強いられた地である。硫黄島を日米が共有する戦傷の場という固定化された認識の呪縛から解放することは容易なことではない。一方で、筆者はこの作業は決して地上戦の実態を希釈化するものではないとも述べる。評者はこの点に大いに同意せざるを得ない。本書は「社会」を描いた。その役割を島民の言葉でつないだところに本書の強みがある。島民のインタビューのなかで見出しにそのまま採用されたものがいくつかあるので以下列記する。第2章「暮らしはいい所だった」、第3章「着の身着のまま」で出された島民、「モノがなかったからね」、第4章「人間の耐久試験」を経て、第5章「島に帰るつもりだったからね」、第6章「ほ

とんど知らなかった」。本書を読み進めこれらの言葉の意味を理解した時、硫黄列島に対する見方が一変する。評者が印象深く感じたのは第5章にある「…みんなで硫黄島で年金暮らししようってね、その相談をしていたの。その友だちも、みんな亡くなっちゃたの。…」(158頁)という語りである。

語りの力は単に固定概念を覆すだけではなく、新たな視点を提供してくれる。本書を読んでから、クリント・イーストウッド監督による硫黄島2部作⁽¹⁾を見直した。映像というものは不思議なものである。今回、再び硫黄島2部作を見て、十一年程前に鑑賞したときにはほとんど何も感じなかった現在の硫黄島の景色に、沈痛な思いを抱かずにはいられなくなった。評者が硫黄島2部作を再び鑑賞し、現在の硫黄島の景色に心をかき乱されたのは、本書にちりばめられたインタビューの言葉が想起されるからに他ならない。硫黄島2部作は硫黄島に関する類似したセリフや風景を忍び込ませ、2作品を相互に観た後、他方の作品の印象が変わるような工夫がされていたと思う。しかし、本書を読んだ後、以前とは全く違うシーンに心を奪われるようになった。硫黄島を見る視点が全く変わってしまったのである。冒頭で述べたように、その変化はジョー・ローゼンタール撮影「硫黄島の星条旗」を眺めるときにも起きるようになった。もう自分の目の焦点は、背景であるはずの硫黄島の大地にずらされたまま動かさなくなったのである。

さて、硫黄列島で「社会」を築き、維持させていったことは並大抵のことではなく、島民のバイタリティーの強さを感じる。ここで、社会インフラに着目し、島民の生活の凄みを確認したい。

まず、「拓殖会社」は硫黄島の各種社会インフラを運営し、島民の生活をコントロールしているかのように見える。硫黄島の元山部落には「拓殖会社の事務所のほか、役場、学校、診療所、郵便

局、警察官駐在所、商店などが集中していた」(28頁)という。筆者は映画『硫黄島からの手紙』が数分間映し出した風景も元山部落であろうと推測する。そのうち、学校と駐在所はほぼ拓殖会社の「外部委託」に近い状態で運営されていた。役所は本土とは異なる機構となっていた。硫黄島の行政のトップたる「世話掛」(1914年～)は官選であった。「島寄合」の議決権を有するという「総代」の選挙権・被選挙権は島に2年以上居住し不動産を所有する25歳以上の男子に限られていた。結果的に拓殖会社と友好な関係をもつ地主のみが参政権をもつことになったことは想像に難くない。診療所に関して記述は少ないが、診療所の医師と拓殖会社との関係は気になる所である。

ある種の既視感を覚えたのは独自金券の流通である。硫黄島ではある時期から1930年代前半までは「茶褐色のハトロソ紙のような封筒の紙で作られたお札」(40頁)で拓殖会社の給与や報酬が支払われ、小学校の教員の給与も現金ではなくこの金券であったという。金券は拓殖会社の指定店舗でしか使用できないもので、ある時期から現金との引換もしなくなったそうだ。独自金券で賃金を支払うというのは炭坑労働などでも行われていた手法であり、それを発行する会社にとっては現金を確保できるのみならず労働力の流出を防ぐ意図もあった。

拓殖会社は役所と通じ合い、警察、学校、通貨を押さえた。ここまでくると硫黄島はあたかも拓殖会社の企業城下町、あるいはそれ以上の存在であるかのように思えるが、島民は拓殖会社がなくても生活再建できると自負する。筆者は硫黄列島には拓殖会社の流通過程から自律したエコノミーが存在したことを強調する。これが硫黄列島民の小作人の強みであった。

特に食に関しては豊かな食材に恵まれていた。これは、単に「暮らしはいい所だった」「島では贅沢しましたよ」という「語り」に依拠している

だけではない。「火山の蒸気で蒸かしたサツマイモ」、「タコの実の鉄火味噌」、「パパイヤと豚肉の煮物」など豊かな料理文化からうかがい知ることができるものである。

硫黄島は水の確保が難しいとされ、米軍は水力発電機で海水を水に変えていたが、島民たちは工夫をこらし雨水の最大限の利用に努めていた。例えば「雨が降ると、洗濯のできるだけのものは、よごれた衣類はもちろん、茶碗でも鉢でも、外に出して」(30頁)洗い、効率よく水瓶で雨水を貯め、後にはコンクリートの水槽や大型貯水槽を造り、数ヶ月分の生活用水、農業用水を賄うことができるまでになった。

確かに拓殖会社は硫黄島のなかで大きな存在であった。しかし、島民が硫黄島に価値を見出しているのはむしろ拓殖会社の支配がおよばなかった「自律したエコノミー」の空間であり、またそれは多様性、複合性を備えたダイバーシティを実現した硫黄列島の文化の上に築かれたものであった。

このように、本書は優れた啓発の書であり、その点で新書としてふさわしいテーマを扱っている。一方で、新書であるならばこうであってほしいと思う点もあった。本書は2点目の目的に硫黄島の社会史を北西太平洋の近現代史に位置づけることを掲げている。そのため硫黄島、北硫黄島の事例を叙述しながら、小笠原、大東島、マリアナ諸島等の事例にも触れる意欲的な作品である。ただし本書を精読していると、その行きつ戻りつする北西太平洋の叙述の中で何度か迷子になった。時折、年代の記述も遡ることがあるため頁を何度もめくり直さなければ事実関係がよくわからない箇所が複数あった。

それから、糖業に関する記述が平面的であり、ひどくもったいないように感じた。本書の副題には「国策に翻弄された130年」とあるが糖業の国策についての記述がほとんどない。しかし、この点をもっと掘り下げべき問題を含んでいる。

はっきり言えば、日本帝国圏内の砂糖はおしなべて国際競争力に乏しく、政府は砂糖輸入がもたらす貿易赤字を解決するために、外国産砂糖に高関税をかけ国内の製糖業を手厚く保護した。20世紀初頭の日本帝国圏内の砂糖生産量増大はその帰結である。

糖業の「危機」に関しても、本書は沖縄、硫黄島の事例(21-22頁)と大東諸島の事例(47頁)を全て1920年代半ばの糖価暴落⁽²⁾で説明しているが、この書き方は問題を矮小化しているように読み取れる。大東諸島の事例では、1927年の鈴木商店の倒産を「糖業不況の影響」(47頁)としているが、一般的には総合商社・鈴木商社と台湾銀行との密接すぎた関係が不良債権を巨大化させ、金融恐慌が起き鈴木商店は破綻したとされている。糖価の暴落の影響のみではあたかも世界情勢に左右されただけのように見えるが、その背景には日本糖業の国家への依存体質や癒着があったのである。このあたりの認識を拓殖会社の描写に投影することができれば、硫黄島の支配構造がもう少しクリアに見えたのではないかと期待する。

最後に若干のないものねだりを述べたが、それは『硫黄島』が意欲作であるが故であり、硫黄島の歴史をアジア太平洋の面で描こうとしたときに大きく浮かび上がったことでもある。本書が世に出た重要性に変わりはない。

註

- (1) 本書での硫黄島2部作の評価は決して高くない。まず『父親たちの星条旗』については戦場死の無残さや無意味さ、兵士のトラウマの深刻さを「見据えた」としつつ、日本軍将兵の人間としての固有性を「排除」していると指摘した。『硫黄島からの手紙』は「栗林英雄史観」の危険性からのがれていないとする。『父親たちの星条旗』で描いた戦争プロパガンダへのアイロニーが、

『硫黄島からの手紙』ではぼやかされてしまったといえる。ただし、『硫黄島からの手紙』は硫黄島に「社会があった」事実を作品に映しこんだことは画期的であったとも述べる。僅かに数分のシーンではあるが、強制疎開直前の集落が登場する。評者も初めて『硫黄島からの手紙』を鑑賞した際に衝撃を覚えたシーンであった。

- (2) 1920年代の糖価暴落の要因は複雑で、単に日本帝国圏内の砂糖生産量が供給過剰に陥ったのではなく、第一次大戦後のジャワ糖の過剰流入に起因する。平井健介『砂糖の帝国—日本植民地とアジア市場』東京大学出版会、2017年。